# びわこ学院大学短期大学部　令和五年度　学校推薦型選抜（公募推薦）「教養問題」

（注）設問で指示した字数には句読点等も含みます。

一　次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。　＊一部改行箇所等を改めています。

福島は「花のライブ」というショーを開くことがあって、ときどき妻と見に出かけることがある。ふつう生け花といえば、すでに花瓶に生けて飾ってある花を眺めるものだが、このライブでは目の前のステージで花を生けて見せてくれるので、花がどのようにして生けられるのか、目の当たりにすることができて①門外漢の私などにはおもしろい。

ライブでは二、三人の弟子もステージに上がって生けることがある。それを見ていて師匠と弟子はこうも違うものかと思ったことがあった。というのは、師匠の福島の生ける花はどれも堂々として大きく見えるのに、弟子が生けた花は、たしかに上手にちがいないのだが、どこか小ぢんまりしてしまう。なぜ、師匠と弟子でこんな違いが出てしまうのか。それはひとえに（1）花というものもつ偶然の要素をかけがえのないものとしてどれだけ生かしているかどうかにかかっている。

一口に松、一口に桜といっても一枝ごとに枝ぶりや花や葉のつき方、色合いがみな違っていて同じものなどひとつもない。もちろん本番の前に花材を調べたり、リハーサルをしたりするのだろうが、ステージに上がって実際、その花を目の前にすると、リハーサルでは気づかなかったところが急に見えてきたり、あるいは、同じ枝かと思うほどまったく違うものに見えたりすることもあるにちがいない。弟子はステージの上でこの変幻する花を手にしたとき、もちろん緊張もあるだろうし、師匠から教わったいろいろの約束事に縛られることもあるだろうが、そのため花のそのときの姿が見えない。弟子が自分では見ていると思っている花はリハーサルのときに見た花であって、（　　Ⅰ　　）そこにある花ではない。そうなると、目の前にある花の姿がほんとうは見えていないわけだから、花を生かそうとしても生かすことなどできないわけだ。その結果、生けられた花はどこかぎこちなく型にはめられているような窮屈な感じがし、小ぢんまりしたものになってしまう。

一方、福島の生け方を眺めていると、片時もとどまらない雲や水のように刻々と変幻する花をどう生かすか、どこをどう切り、どこにどう生ければ、その花がもっとも生きるかということだけを考えている。百人を超す観衆の目の前で自分の手にある一本の枝、一輪の花の今の姿を一瞬にして見極めると、その花の姿に応じてまさに［　A　］に鋏を入れ、生けてゆく。生け花の難しい約束事などもはや眼中になく、すべてを忘れて花のそのときの姿を生かすことに夢中になっている。

ときには背丈より高い松や桜の枝を手にし、見上げ、まるで自分のいちばん好きな姿になりなさいと呼びかけるかのように揺らし、枝を広げてやる。ライブは高層ビルの（a）リンリツする東京の真ん中で開かれているのだが、その松の枝のあった空や桜の花を吹いていた風を感じているようでもある。まるで童女が広々とした野山で花と遊んでいるような自由自在さであって観客の目にはそれがすがすがしいものに（b）ウツる。

こうして生けられた花は枝の一本一本、花の一輪一輪がみなのびのびとしているばかりではなく、花の生けられた空間、東京のとあるホールの②無機質な空間が、どこからか風が通い、命を宿したかのようにいきいきと輝きはじめるのだ。生け花は花を生かすと書くのだから花を生かすのはいうまでもないが、「フラワーアレンジメントとどこが違うのか」という私の疑問に対する「花によって空間を生かす」という即答は花を生かすことによって空間を生かし、その花によって生かされた空間が今度は逆に花を生かすということなのだろう。

このように日本の生け花では空間は花によって生かすべきものであって、フラワーアレンジメントのように花で埋め尽くすものではない。花とそのまわりの空間は敵対するものではなく、互いに引き立てあうものとしてある。その花の生けられる空間とはいうまでもなく私たちが呼吸をし、生活をしている空間である。それはそのまま、間といいかえていいものなのだ。

日本語の間という言葉にはいくつかの意味がある。まずひとつは空間的な間である。「すき間」「間取り」というときの間であるが、基本的には物と物のあいだの何もない空間のことだ。絵画で何も描かれていない部分のことを余白というが、これも空間的な間である。

日本の家は本来、床と柱とそれをおおう屋根でできていて、壁というものがない。これは部屋を細かく区分けし、壁で仕切り、そのうえ、鍵のかかる扉で（c）ミッペイしてしまう西洋の家とは異なる。西洋の個人主義はこのような個室で組み立てられた家に住んできたからこそ生まれたというのはよくわかる話である。

それでは、壁や扉で仕切る代わりに日本の家はどうするかというと、障子や襖や戸を立てる。「源氏物語絵巻」などに描かれた王朝時代の宮廷や貴族たちの屋敷を見ると、その室内は板戸や蔀戸、襖や几帳などさまざまな間仕切りの建具で仕切られてはいるものの、いたるところすき間だらけである。西洋の重厚な石や煉瓦や木の壁に比べると、何という軽やかさ、はかなさだろうか。

（　　Ⅱ　　）、このような建具はすべて季節のめぐりとともに入れたりはずしたりできる。冬になれば寒さを防ぐために立て、夏になれば涼を得るためにとりはずす。それだけでなく、住人の必要に応じて、ふだんは座敷、次の間、居間と分けて使っていても、いざ、大勢の客を迎えて祝宴を開くという段になると、すべてをつないで大広間にすることもできる。このように日本人は昔から自分たちの家の中の空間を自由自在につないだり切ったりして暮らしてきた。

次に時間的な間がある。「間がある」「間を置く」というように、こちらは何もない時間のことである。芝居や音楽では声や音のしない沈黙の時間のことを間という。

バッハにしてもモーツァルトにしても西洋のクラシック音楽は次から次に生まれては消えてゆくさまざまな音によって埋め尽く

されている。たとえば、モーツァルトの「交響曲二十五番」などを聞いていると、息を継ぐ暇もなく、ときには息苦しい。モーツァルトは沈黙を恐れ、音楽家である以上、一瞬たりとも音のない時間を許すまいとする（d）ショウドウに駆られているかのように思える。

それにひきかえ、日本古来の音曲は琴であれ笛であれ、音の絶え間というものがいたるところにあって長閑なものだ。その音の絶え間では松林を吹く風の音がふと上ずることもあれば、谷川のせせらぎが聞こえてくることもあるだろう。ときには、この絶え間があまりにも長すぎて、一曲終わってしまったかと思っていると、やおら次の節がはじまるということも珍しくない。そんなふうに、（2）いくつもの絶え間に断ち切られていても日本の音曲は成り立ってしまう。

空間的、時間的な間のほかにも、人やものごとのあいだにとる心理的な間というものもある。誰でも自分以外の人とのあいだに、たとえ相手が夫婦や家族や友人であっても長短さまざまな心理的な距離、間をとって暮らしている。このような心理的な間があってはじめて日々の暮らしを（e）エンカツに運ぶことができる。

こうして日本人は生活や文化のあらゆる分野で間を使いこなしながら暮らしている。それを上手に使えば「間に合う」「間がいい」ということになり、逆に使い方を誤れば「間違い」、間に締まりがなければ「間延び」、間を読めなければ「間抜け」になってしまう。間の使い方はこの国のもっとも基本的な技であって、日本文化はまさに間の文化ということができるだろう。

では、この間は日本人の生活や文化の中でどのような働きをしているのだろうか。そのもっとも重要な働きは異質なもの同士の対立をやわらげ、調和させ、共存させること、（　　Ⅲ　　）、和を実現させることである。早い話、互いに意見の異なる二人を狭い部屋に押しこめておけば喧嘩になるだろう。しかし、二人のあいだに十分な間をとってやれば、互いに共存できるはずだ。狭い通路に一度に大勢の人々が殺到すれば、たちまち身動きがとれなくなってパニックに陥ってしまうが、一人ずつ間遠に通してやれば何の問題も起こらない。和とは異質のもの同士が調和し、共存することだった。この和が誕生するためになくてはならない土台が間なのである。［　　B　　］。

（長谷川櫂『和の思想』中公新書）

（注）福島……福島光加、草月流の花道家。日本在住の多くの外国人にも生け花を教え、また海外でも指導している。

問一　傍線部（a）～（e）のカタカナを漢字で書きなさい。

問二　二重傍線部①・②の意味として適するものをそれぞれ次より選び、記号で答えなさい。

① 門外漢（ア　興味・関心のうすい人　　イ　専門外の人　　ウ　経験のない人　　エ　一般的な人　）
② 無機質（ア　がらんとしたさま　　イ　広々としたさま　　ウ　生気のないさま　　エ　整然としたさま　）

問三　（　　）Ⅰ、Ⅱ、Ⅲに最も適する語を次より選び、それぞれ記号で答えなさい。

Ⅰ（ア、もちろん　　イ、やはり　　ウ、おそらく　　エ、もはや　）
Ⅱ（ア、しかも　　イ、ところが　　ウ、ちょうど　　エ、ただし　）
Ⅲ（ア、たとえば　　イ、とりわけ　　ウ、つまり　　エ、あるいは　）

問四　［A］に最も適する四字熟語を次より選んで、漢字に直して答えなさい。なお、解答欄には漢字のみを記入しなさい。

だいたんふてき　　りんきおうへん　　ぼうじゃくぶじん　　たんとうちょくにゅう

問五　傍線部（1）「花というもののもつ偶然の要素」とありますが、このことを具体的に言い換えた、最も適する箇所を十字以内で抜き出しなさい。

問六　傍線部（2）「いくつもの絶え間に断ち切られていても日本の音曲は成り立ってしまう」とありますが、それはなぜですか。その理由を簡潔に答えなさい。

問七　［B］に入れるべき内容として、最も適するものを次より選んで記号で答えなさい。

ア　和と間の共存によって日本文化が成り立っているといえる
イ　和と間はこのように表裏一体のものなのである
ウ　和はこの間があってはじめて成り立つということになる
エ　和を実現することにより間の働きを見出すことができる

問八　本文を内容的に前段と後段の二つの段落に分けるとすると、後段はどこから始まりますか。後段の最初の十字で答えなさい。

問九　この問題文の直前で、筆者は福島に「生け花」と「フラワーアレンジメント」との違いを尋ねています。その問いに福島はどのような回答をしたと考えられますか。解答欄の様式に沿って簡潔に答えなさい。

二　次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

「人間は言葉を持つ動物である」という有名なアリストテレスの言葉があるように、人はさまざまな話し方をする能力を持っています。対話分析学によると、①理□整然とした説得力のある話し方もできるし、複雑で、(a)センサイな感情を伝える話し方も、深い(b)ガンチクのある表現もできます。

人間は何かを伝えるときにも、そのことを［　Ⅰ　］知っていそうな人に対する伝え方、ある程度知っている人への伝え方、まったく知らない人への伝え方、というように、さまざまな伝え方を知っている生き物で、その文化の(c)デンショウは、［　Ⅱ　］独特のものではないかと思います。

②□差万別、多様な話し方を厳密に③定(　)し、区別することは難しいし、人によっては、生きた言葉が③多(　)にわたっていることもあるため、ここでは私の考えている区別を記しておきます。

［会　話］

とくに話題や目的があるわけではないが、好意的な雰囲気づくりを示す「おはようございます」「いいお天気ですね」というような挨拶、［　Ⅲ　］、雰囲気を和やかにする雑談です。無意味なようでいて、それでも人間社会の潤滑油として必要なものです。

はじめてイギリスに行ったとき、私は顔を合わせる人がすべて微笑んでみせてくれるのを経験しました。ドイツに行ったときには、それはありませんでした。

好意とまではいかなくても、緊張を解く雰囲気づくりは、「あなたを④無(　)しているわけでもなく、④敵(　)しているのでもありませんよ」という気持ちを伝えようとしているのだと思いました。

テロの問題が世界を緊張させている今も、そのような人間的な雰囲気づくりがあってほしいと思います。

［対　話］

基本的には一対一の対等な人間関係の中で、相互性がある（一方的に上の人が下の人に向かって話すのではなく、双方から話を往復させる）個人的な話し合いです。

この後に述べる、⑤ディスカッションや⑥ディベートと違い、特定の人とある目的をもって話し合われる対話に特徴的なのは、個人の感情や主観を(d)ハイジョせず、［　Ⅳ　］その人の個性とか人格を背景に、自己を開放した話し方が行われている点です。自己防衛意識が強い人との対話は成り立たないと言われているのはその言い換えでしょう。

対話には、［　Ⅴ　］議論して勝ち負けを決めるとか、意図的にある結論にもっていくとか、(e)イロンを許さないとか、そういうことはありません。ある論点が何度も発展的に往復するうちに、お互いにとって自然な発見があり、大きな視野が開けるところに特徴があります。結論を得られなくても、対話後にも長く続く問いかけがあり、何年もたってから、その対話の大きな解が得られる場合もあります。

（暉峻淑子『対話する社会へ』岩波新書）

問一　傍線部（a）～（e）のカタカナを漢字で書きなさい。

問二　傍線部①、②の空欄に、それぞれ漢字一字を入れて、四字熟語を完成させなさい。

問三　傍線部③、④のそれぞれ二か所の空欄には同じ漢字一字が入る。その漢字一字を答えなさい。

問四　空欄Ⅰ～Ⅴに入る適語を、次のア～オから選び記号で答えなさい。記号はそれぞれ一回ずつ使うものとします。

ア　むしろ　　イ　あるいは　　ウ　おそらく　　エ　もともと　　オ　すでに

問五　傍線部⑤、⑥の意味として最適なものを選び、それぞれ記号で答えなさい。

ア　向かい合って話すこと、相対して話すこと
イ　あるテーマについて、肯定側と否定側に分かれて行う討論
ウ　会合、打ち合わせ
エ　自由に意見を言い合う議論

問六　次のア～エについて、本文の内容の説明として正しければ○、間違っていれば×をつけなさい。

ア　人はさまざまな話し方をする能力を持っており、その伝え方もさまざまである。
イ　会話には挨拶や雑談があり、人間社会の潤滑油として必要なものである。
ウ　対話は一対一の対等な人間関係において、相互性に関係なく成立するものである。
エ　対話は、その人の個性や人格を背景に、自己を開放した話し方が行われている。

# 正答例＆解説　2023年度 学校推薦型選抜（公募推薦）【国語】

## 正答例

**一**

問一　(a) 林立　(b) 映　(c) 密閉　(d) 衝動　(e) 円滑
問二　① イ　② ウ
問三　Ⅰ エ　Ⅱ ア　Ⅲ ウ
問四　A 臨機応変
問五　(1) 刻々と変幻する花
問六　(2) 間が生かされているから。
問七　B ウ
問八　日本語の間という言葉
問九　生け花は　花によって空間を生かそうとする。
　　フラワーアレンジメントは　花によって空間を埋めようとする。

**二**

問一　(a) 繊細　(b) 含蓄　(c) 伝承　(d) 排除　(e) 異論
問二　① 路　② 千
問三　③ 義　④ 視
問四　Ⅰ オ　Ⅱ ウ　Ⅲ イ　Ⅳ ア　Ⅴ エ
問五　⑤ エ　⑥ イ
問六　ア ○　イ ○　ウ ×　エ ○

| 大問 | 問 | 配点 |
|---|---|---|
| 1 | 1 | 各1点×5 |
| | 2 | 各1点×2 |
| | 3 | 各1点×3 |
| | 4 | 1点 |
| | 5 | 2点 |
| | 6 | 2点 |
| | 7 | 1点 |
| | 8 | 2点 |
| | 9 | 各1点×2 |
| 2 | 1 | 各1点×5 |
| | 2 | 各1点×2 |
| | 3 | 各1点×2 |
| | 4 | 各1点×5 |
| | 5 | 各1点×2 |
| | 6 | 各1点×4 |
| | | 合計40点 |

駿台 SUNDAI　大学受験のエキスパート！
## が詳しく解説！

### 攻略ポイント

全体で大問が２題で、大問一の設問数が９問、大問二の設問数が６問。設問内容は、漢字問題、語句の意味を問う問題、空欄補充問題、抜き出し問題、内容説明の問題、理由説明の問題、内容合致の問題である。全体的な難易度は高校基礎から標準レベルで、設問は基礎的な学力を問うものであり、難問レベルのものはない。漢字の読み・書き、抜き出し、記述問題など、記述式も出題されている。文章は比較的読み取りやすい内容であり、大問一の文章は3500字程度で標準的な文量であり、大問二の文章は1000字程度でやや短めの文量である。設問についても、正確に文章内容を読み取る力を問うものである。学校で学習する内容を理解して、丁寧に文章を読み、設問に対して正確に解くことを身につけよう。そのうえで、びわこ学院大学短期大学部の過去問題を解いてしっかりと準備しよう。過去問題は必ず時間をはかり、２回以上解いて、読むスピードや解くスピードといった時間配分を確認しておこう。

### 大問一

問四の空欄補充問題では、前後のつながりを確認して判断しよう。空欄Ａの直前「花の姿に応じて」と直後「そのときの姿を生かす」というつながりを確認すれば、〈状況に応じた行動や対応をとること〉という意味の「臨機応変」に決まる。選択肢にあるものをはじめに、四字熟語についての知識を確認して、試験本番で正解できるよう準備しよう。

問九では、本文には書かれていない箇所の内容を演繹・推論する問題。書かれていないからといって、好き勝手に思いつくままに書いてよいというのではない。必ず、本文から解答の根拠を特定して、それに基づいて解答を作成することを心がけよう。ここでは、「生け花」と「フラワーアレンジメント」違いについて説明することが求められているので、それらが説明されている第７段落を中心にして、解答要素をピックアップして、答案にまとめよう。記述対策として、習っている先生に添削をお願いして、改善点などのアドバイスをもらうのもよいだろう。

◎この問いを例題にして学ぼう！
「～考えられますか」という推論させる問題でも、必ず本文にある根拠に基づいて、解答を考えよう。

### 大問二

問一は漢字の書き取り問題、問二は四字熟語を完成させる問題、問三は熟語を完成させる問題である。合格に向けて、全問正解をめざそう。漢字問題は国語の基礎知識を問うものであり、おぼえていれば正解することができる。それゆえ、漢字の問題集を利用して集中的にインプットしよう。例えば、「一日に10問解く」「まちがえたら３回ずつ書いて練習する」というように目標を決めて、取り組んでいこう。とくに漢字の書き問題では、読みやすい字で、丁寧に楷書で書き込もう。

問五は語句の意味を問う問題である。おぼえていれば正解でき、合格に近づく。漢字対策と同様に、語彙力対策も目標を決めて、取り組んでいこう。

問六は内容合致問題である。「正しければ○、間違っていれば×」をつけるというタイプであるが、丁寧に選択肢をチェックすれば正しく正誤判断ができるので、必ず全問正解をめざそう。アは第１段落に、イは第４段落に、エは第９段落に、それぞれ合致する。ウは第８段落の「相互性がある」という内容に反する。